

川柳雜誌

第一卷第五號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
大正十三年六月十日印刷
大正十三年六月十五日發行



川柳雜誌 第一卷 第五號 (大正十三年六月十五日發行) 目次

作家として

句になる迄(三)

偶感

趣味に生きる者

浚花莊にて

川柳書架(三)

近作柳樽

別離

二階

辭職

六厘坊忌

第八第十支部聯合句會

川柳塔

花童子、柳翠、柳路、零骨、雅幽、一洲、徹底郎、莢豆

一聲、松雨、彩霞、二柳子、古城山

最近の柳誌

相元紋太(六)

遅日莊主人(三)

森東魚(五)

森田輝翠(六)

塚崎松郎(三)

(二四)

麻生路郎選(二)

坂井久良岐選(二六)

吉本寛汀選(二七)

高橋古城山
吉川啞人共選(一九)

二柳子記(二〇)

花童子記(二四)

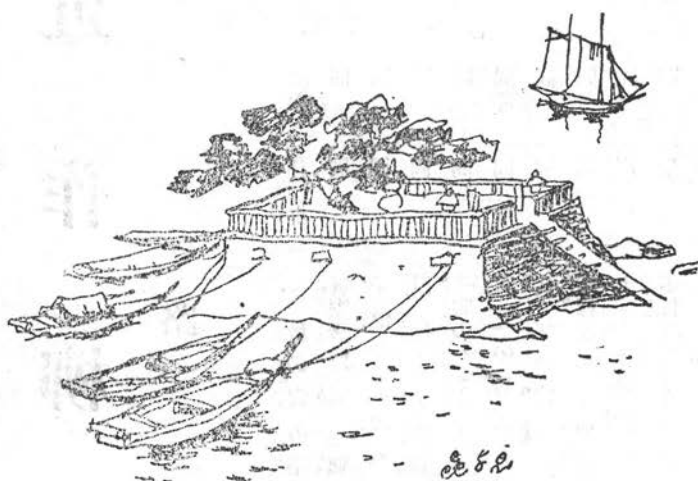
(二五)

路郎生(二九)

編輯後記

川柳雑誌

第一卷第五號



川柳の畑にはま
だく未墾の地
がのこされてる
ます。

お互ひに一蹴を
肩にして出掛け
ませう。(路)



近作柳樽

路郎 選

この儘で居たい懐手の願ひ
残されたらしい校門一人出る
泣いて居るうちがお前の極樂さ
黙つてる時が泣いてる時であり
いつはつて返した後の心持
已惚れて居た事今になつて知り
玄關をあけるさ犬の家が見ぬ
氣の小さい事は口が上手です
鐵筋の屋根にもなにか干してある
カレンダーの如く一日づゝ暮し
萬さいふ金をすなほに拂ふなり
母親の異見に鍋の煮むつまり
首すぢの垢を見乍ら散髪屋

同 函館

同 狂水
同 松郎

女房の親の手前も少しあり
警察署醫者に領收書を書かせ
子供もう押入れあける智恵がつき
段梯子子供我でに上つて來
來客のハンカチにちこ恐れ入り
貧乏の男夫人に見込まれる
父親の寢姿見れば口を開き
蚊帳を出て便所に迷ふ泊り客
ナーニ安物ださ帽を脱いで見せ
電柱でやうやく取つた下駄の石
さき色の手柄に年をうたぐられ
母親の無智を笑つて膝につき
間違つた算術に泣く氣の弱さ

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
金澤
紅法師



作家として

梶 紋 元 太

私は川柳を作つてゐる。昨日までも川柳を作りにつつた。明日からも亦川柳を作りにするであらう。私の一生は川柳を作ることに終始する。私が川柳を知つた時は、もう句を作つて居たそれから小止みなく作りにつつてゐる。私は評論家でも無い。批評家でも、研究家でもない。たゞ川柳を作る者である。評論をするなと言はれ、ばせずにも居られる。批評を止めよと言はれ、ばせずにも居られる。然し句を作るな言はれたなら私の生命がなくなる。私の川柳研究も批評も句を作ることからは必要を生じて行はれるけれ共句を作ることは誰れの爲めでもない。何の爲めでもない。只だ作りたから作るのである。これは何

うしても止むに止まれない。その上、句を作るさいふここから自然に私の精神的にも肉體的にも川柳主義とも云ふべき影響を多大に與へられて私の現在の生活の基礎をなしてゐる。云つても過言ではない。今では句を作ることを廢めるのは私の生涯を中途で挫折させると同じことである。それほさ句を作ることは私にまつて大切な生活の主要素である。喰ふことも生きることも句を作ることに依つて初めて意義をなすのである。

短歌にも俳句にも私の作詩本能は喚び起されなかつた。川柳を知り、柳樹を讀むに及んで極めて自然に私は句を作り始めた。そして作りを作る。古川柳研究者は私の無謀を嗤ふかも知れない。川柳の本體を知らんミ欲せば古川柳の研究を怠つてはな

らない。或はさうかも知らぬ。だが私の句を作る心は古川柳の研究を深くするを待たないで直に動き始めたのである。

雪打の加勢に乳母の片手わざ

きよぶきに里の女は値をはなし

もし伊勢三思ふが親のちから草

つく田へも二人ぐらいは厄拂

あんまこりいびきを聞き手ぬきをし

若殿の持ははへぬきのやまいなり

(柳樽第二篇第一頁)

恙うして讀んでゆくうちに私の頭は石こ玉こを振り分ける。

蠶が桑の葉を食ふ様に旨味なここはさしく食ふ。そのあこはもう無言の作句三昧である。



私は世間や人の爲めに句を作るので無い。交遊の爲めでも名譽の爲めでも無い。後世の研究家の爲めに現代の人情を句に残して置くのでも無い。たゞ作りたくなり、作れるから作るのである。自然の眺め自然の中に蠢めく自分を眺めてゐるうちに驚いたり呆れたり可笑しくなったり淋しくなったりするのである。そんな事を作りたくなり作れるから作るのだからそれだけである。人間を見るのである。自分を見るのである。自分の魂

の成長を見るのである。たゞそれだけである。たゞ八千人の人の成長を賞めて呉れたまで、その句が賞讃を博し喝采を得やうとする目的の下に作られた句であるここを私自身が知つてゐたならば私の嬉しさはたゞ上面だけのものである。私の句が私自身を喜ばせるには、その句が私の奥底に充されたものでなければならぬ。



或時期まで夢中であつた私は途中から斯うした心持を懐き乍ら句を作つた。そして私の川柳は極く眞面目に眞剣で取扱ふた心算である。たゞ私の三省せねばならぬここは、句を作る機会が小集や例會の場合が多い爲めにその句會の爲めに句を作り題の爲めに句を作つたここはないか。選者の爲めであつたり賞品のためであつたりしたここは無いかである。大體川柳には社交的氣分が豊富なために鑑賞者を對象にして句を作るここが平氣で行はれる。それは間違ひでないにしても私には堪へられない社交的氣分に災ひされて對者の心持を窺ひ嗜好を量る。それに當て込み處當り等、詩としての危機が潜んでゐる。私は川柳を詩でなければならぬと言はないけれ共、川柳は詩でありたいの論者である。少くも私の川柳だけは詩でありたい。これからの私はこの主義でこの心懸けで休みなく句を作る考へである。

六厘坊忌

五月十六日夜
於 端の坊

六厘坊忌を営む、來會者左の如し

路郎、古城山、紅法師、香風、松郎、光太樓、彩峯、輝翠、徹底郎、
千代二、猪太郎、嶺月、廣賀、春夫、囀三、蝶一、双柳、柳骨、小鼓
麥郎、一洲、竹榮、眠聲、かほる、涎湖、薰流、夢路、波郎、二柳子
(來會者名簿より)

天才 (宿題) 路郎 選

天才のそれだけ辭書も汚れて居 麥郎
此村を出て天才も知れるなり 古城山
腫ものゝ様に天才扱はれ 一洲
天才と共に妻をも認められ 馬行
天才の涎れ外史をにじませる 蝶二
天才はうつかり墨を落すなり 彩峰
天才を天才にせぬ戀がたき 二柳子
天才の眼はたん／＼と窪んで來 波郎
天才が大人の様な聲を出し 涎湖
金の要る天才親が持てあまし 駒人
天才云はれたまんま二年越し 薰流
天才も流行の中に數へられ 彦六

天才の筆にじんだりかすれたり 凡平
天才の頭の上の天井にて 小鼓
枕高くねられぬ才をさづけられ 同
天才が親を不思議に思はせる 助六
巡業に天才の子を貰ひうけ 同
天才はたつた一言云ふたゞけ 光太樓
月明かりうけて天才ぶらり出る 同
天才は今日も書齋で陽を拜み 同
見込まれて天才親と別れ生 輝翠
質問をする天才笑ふのみ 同
天才と睨んでゐるは叔父ばかり 松郎
天才のひさい吃りが惜かられ 同
千松がみんなを泣かす初舞臺 紅法師
同

天才がくびに纏帯巻いて來る 徹底郎
天才とお出入りだけが申上げ 同
年齢きいて又天才を褒めなをし 同
天才へ親類あんなもの云ひ 路郎
天才は食かねた日のこもかき 同

仲居 (席題) 紅法師 選

三味線を仲居頭に教われ 夢路
考へて居る仲居の口達者 古城山
寄合ひでくる仲居が變つてる 光太樓
日暮から仲居が休む用が出來 駒人
ほろ酔の冗談仲居おこるなり 柳骨
段はしご仲居は馴れた音をさせ 零骨
足音へ仲居襦をたてに立ち 輝翠
勘定をする頃外の仲居も來 徹底郎
仲居又女將にそつと呼び出され 波郎
指輪賣るこゝに仲居の二三日 小鼓
千圓がまだたまらない仲居なり 路郎
仲居その祝儀袋を又使ひ 松郎
縫なほす積りで仲居ほさいて居 同

五 客

稼ぐだけ費はれてゐる仲居なり 路郎

段梯子からは仲居が運ぶなり
前掛けを替へ仲居は情人にあひ
裾切れる話仲居は猪口を置き
悪酔い知つた仲居は行届き
古城山

丸監に結ふた仲居は冷かされ
光太樓

藝者こは遠ふみ仲居扱ねてみる
彩蜂

目に見わて太る仲居の御案内
路郎

家 (席題) 松郎選

一二軒尋ねて歸る若旦那
路郎
この邊で大きい家が風呂屋なり
夢路
算盤も家も先代からのもの
麥郎
建替も知らずにつばめ巢を造り
古城山
また次ぎの家を頼み三味をひき
輝翠
摘草に来るご新しい家が見ゆ
薫流
二人には少し大きい借家なり
竹榮
家右に左に葱の坊主なり
小鼓
取こみの家へうるさい乞食が來
春夫
軒切りに家主も腹が立つている
順三

川あつたまこへ家建つ新開地
同
まあ家はいれぬ開き粹な伯父
駒人
噂のあき家未だにふさがらず
同
狂言の家出は伯父をたよつて來
同

佳

家明は座蒲團敷かすいんじまい
涎湖

家がまわ餘程儲からねば行けず
光太樓

家がまわ云つて稅務署承知せず
古城山

この家にたつた一つの屏風なり
路郎

御無心に見上ぐ天井の高いこ
蝶二

我家に不足が出来る嬉しい日
同

家中を探して腹を立てゝ居る
徹底郎

もう家がなくなつてから景を
同

旗出した家から出前持ちが出る
紅法師

一二軒買ふて娘に残しき
路郎

畫の間に風呂を濟ました一軒家
廣賀

家中を探す間に拾はれる
夢路

家主の方でも理屈持つて居る
松郎

敷居 (席題) 夢路選

敷居越し見舞の言葉申し上げ
古城山

懸取においさの痛い敷居なり
彩峯

電燈がついて敷居の光るこ
松郎

喜びを知らず敷居にけつまつき
波郎

敷居から敷居へ急ぐ拭き掃除
同

夜の蜘蛛敷居の隅へ追ひ詰める
光太樓

敷居から少しはなれて舞妓立ち
同

敷居から向ふて掃げぬ風があり
呑風

敷居から向ふは女同士なり
同

敷居から引返されるかくし藝
蝶二

手をついた女中へ敷居横たわり
輝翠

敷居拭くたびに障子の音をさせ
松郎

頼母子のつりを敷居へ並べられ
古城山

敷居まで來るご女中の用は足り
小鼓

自動車敷居へ來てくつがわり
麥郎

料理 (席題) 互選

學校の法で面倒くさい料理
夢路

第一支部句會

四月二十六日の夕刻から大阪市電築港
託兒所樓上で支部句會を開催しました。
出席者は左の通りです。(一柳子記)

路郎、溪花坊、飛水、凡平、薰流、葛
葉、眠聲、義矢滿、嶺月、千代二、か
ほる、双柳、柳骨、廣賀、秀坊、助六
輝翠、蘆穂、徹底郎、松郎、二柳子
(名簿から)

自慢 (兼題) 本田溪花坊選

二次會の自慢話も氣に入らず 雲川
骨董屋國の自慢もちき喋り 嶺月
賞られた方は自慢をしたがらず 百石
自慢してお茶の冷たを教へられ 義矢滿
里の父嫁の自慢はそればかり 双柳
只一つ自慢は村の活字引 一聲
自慢する程に繪具の牙わてゐず 輝翠
死んだ子の自慢住職聞かされる 凡平
旦那又自慢の舞で笑はせる 同
女の子なんにもならぬ自慢なり 柳骨
新世帯安う買ふたが自慢なり 同
御自慢の隣りはだれも居ぬ積り 松郎

料理 本なき、本屋へ夫婦連れ
轉寢の仲居に閑な 小料理屋 波郎
料理屋の手摺へ酔ふた同士なり 同
寢床から値打を入れる送り膳 蝶二
窮屈に鯛は折へ三納められ 同
料理通こんなところで飲むの也 路郎
二三品、しらへ女房待つて居る 同
こもかくも玉葱を買ひ肉を買ひ 同
寄合に満員、ミなる 小料理屋 順三
料理人自動車の音聞いただけ 同
組板がくほん、料理上手なり 同
料理人炭遠慮なくついで居る 同
料理場、石へ鯛が光つてる 同
料理屋、つわの足の事が出来 同
小料理屋、つわの足の事が出来 松郎
折詰の中から明日のおかずなり 同
送り膳料理のほぎを思はせる 同
料理人、いつのむのんか貰入 同
泊らうに二鶴のからまむし 同
折詰の見本を、用度係、食ひ 同
お任せの料理に得意先に呑み 同
料理人、今拭いた手を又ぬらし 同

小料理屋一軒だけの灯がのこり 二柳子
このしろはよつほき罪をも見ゆ 涎湖
空樽を三つ並べた 小料理屋 駒人
料理屋を妓丁這入るには、からず 一洲
有り合せ、庖刀巧く使つてる 千代二
料理屋からこれば妻君歸つて来 春夫
人数の知れぬ料理になやまされ 双柳
出前持料理見習ふ氣になれず 彩峰
播半の料理もたべた養子なり 眠聲
もう山さ、料理屋のかれす、き 同
料理屋の普請に仲居追ひ出され 柳骨
料理屋の仲居へ江戸ッ子一人殖 同
料理番お休日にはセルを、着て 廣賀
料理屋で會計だけは跡になり 同
門出祝ひ母の料理が並べられ 嶺月
料理人、大きな下駄の音を立て 同
すの物も吸物もする母であり かほる
鯉もろて母は料理に困るなり 同
一人、女め各へ料理屋五人立ち 輝翠
料理、本亭主にあわぬ味に出来 同
居候、今日の料理を頂戴し 古城山

自慢して一服喫ふにむせてゐる 同
廣告に自慢の出来る品ばかり 芦穂
國自慢見せたい様な事ばかり 同
いゝ事をいひこいふたで笑はる 路郎
自慢にもならぬ社長のおそび也 同

一年生 塚崎松郎選

教へられた通りに歸る一年生 嶺月
電車道走つて渡る一年生 凡平
一年生言葉使ひがちに變り 助六
遠足に十三まで行く一年生 義矢満
ぞんざいな言葉を使ふ一年生 同
校門を一年生は手をつなぎ 芦穂
自由講へ一年生の字が歪み 同
クレクンで點貫ろて来る一年生 溪花坊
參觀の母を見付ける一年生 同
先生の笛を待つてる一年生 柳骨
一年生鼻をたらしして懐手 同
一年に校長さんの娘おり 同
(佳)一年生キヤラメルは讀も也 路郎
一年生休みが腹に入らぬなり 同
一年生袴で拭いて叱られる 義矢満

君が代に傍見してゐる一年生 溪花坊
夕刊へ一年生は座らされ 松郎
金庫 橋本二柳子選

燒跡の金庫自慢の札が立ち 芦穂
會計は金庫の鍵を持つて去に 廣賀
金庫の前で目を想像し 助六
金庫の形を取つた冷蔵庫 かほる
事務員も手傳ひ金庫の場所を變 嶺月
不渡りの約手に金庫据たまゝ 溪花坊
きしやな手で手提金庫の蓋を開け かほる
株券を買ふて金庫に用が出来 凡平
懸取は金庫の音を聞きわける 徹底郎
支配人金庫の前を教へられ 路郎
公設を終ふて金庫提て去に 義矢満
風呂へ行く間金庫を預けられ 路郎
來客で金庫鬼に角閉められる 溪花坊
(佳)掛取りは空く金庫見て歸り 同
金庫の鍵の行方へあはてだし 双柳
金庫を給仕揃々あけに来る 輝翠
それ以來女房金庫の鍵を持ち 路郎
金庫屋の小僧手輕るに開るなり 柳骨

金庫を据に來た人酔ふて去に 助六
判取帳金庫へかかん當て、持ち 松郎
おもむろに金庫から出す衛生費 同

みだれ籠 森田輝翠選
みだれ籠渡せば女鍵を呉れ 廣賀
伊達巻がみだれ籠へひつたくり 千代二
みだれ籠出されて困る下着あり 双柳
みだれ籠郎下で摺つて叱られる 助六
枕から一尺はなれてみだれ籠 かほる
番臺が尻目につけたみだれ籠 徹底郎
流連がひつくりかへすみだれ籠 松郎
他所行二ツ出されたみだれ籠 凡平
お歸りの後に淋しいみだれ籠 同
猿股に恐縮をするみだれ籠 路郎
みだれ籠へ女小さくちゞこまり 同
お供にも矢つ張り一ツみだれ籠 義矢満
みだれ籠襖一重が氣にかゝり 同
早立ちに客が躓くみだれ籠 同

五客

あつち向き着物を入らみだれ籠 双柳
みだれ籠足で涼しい方によせ 柳骨

紋附(もんづけ)がきつちり這(はい)入(い)るみだれ籠(かご)
 みだれ籠(かご)冬の衣裳(いせう)がもりあがり
 みだれ籠(かご)今日(けふ)立つ客(きやく)に揃(そろ)へられ
 路(ぢ)郎(ら)郎(ら)郎(ら)

(人)座敷着(ざしきぎ)を疲(つか)れ脱(は)れみだれ籠(かご)
 溪花坊(せいかぼう)

(地)嫁(よめ)の荷(に)の中に幅(は)みだれ籠(かご)
 同

(天)敵娼(あひだ)の養(やし)をみせるみだれ籠(かご)
 松郎(しょうら)

干潮(かんしほ) 互選(ごせん)

干潮(かんしほ)は泥(どろ)ばつかりの川(がは)さなり
 眠聲(ねいせい)

干潮(かんしほ)に網(あみ)すく膝(ひざ)へ陽(ひ)があたり
 助六(すけむす)

干潮(かんしほ)に船(ふね)はそのまゝ残(のこ)つてる
 嶺月(ねづき)

干潮(かんしほ)を近道(ちかみち)にする面白(おもしろ)さ
 義矢満(ぎやまん)

干潮(かんしほ)に船(ふね)は投(な)られたやうにゐる
 溪花坊(せいかぼう)

干潮(かんしほ)のまきに寫(うつ)さぬ二見浦(にみうら)
 葛葉(くずは)

干潮(かんしほ)で小舟(こぶね)横腹(よこはら)見(み)せて居(ゐ)り
 廣賀(ひろが)

何丸(なにまる)さ何丸(なにまる)潮(しほ)が引き残(のこ)し
 路郎(ぢら)郎(ら)郎(ら)

第八支部聯合句會

卯月(うづき)拾八(じゅうはち)日夜(にちや)夜櫻(やざくら)も何(なに)のその多聞(たもん)俱樂部(くらくぶ)
 (神戶)に集(あ)る人貳拾貳(にじゅうに)名(な)席題(せきだい)に宿題(しゆくだい)に各
 自力(ぢりき)作(さ)を競(せう)いて心(こゝろ)ゆく許(ゆる)り句(く)に耽(た)りて和
 氣(わ)霽(は)るの中(なか)散會(さんかい)(幹事)

路郎(ぢら)郎(ら)郎(ら)古城山(こじやま)、溪花坊(せいかぼう)、一洲(いっしゅう)

太郎坊(たろうぼう)、黒汀(くろてい)、竹榮(たけさか)、左馬樂(さまがく)、城雨郎(じやうあめら)
 紫灯(むらさきあかり)、琴月(ことづき)、一笑(いちごう)、夢遊(むぎゆう)、枝呂(えだろ)、南耕(なんこう)
 夢奇痴(むぎち)、東洋鬼(とうやうき)、柳坊(やなぎぼう)、柳翠(やなぎすい)、蘆穂(あしほ)、
 彩霞(さいか)

互選(ごせん)

盃(さかづき)を兩手(りやうて)に受(う)て賞(あ)められる
 琴月(ことづき)

花(はな)の下(した)飲(の)む盃(さかづき)にひきつ散(ち)り
 竹榮(たけさか)

盃(さかづき)洗(せん)はチリンチリン運(は)はれる
 南耕(なんこう)

末席(すえき)へ盃(さかづき)、一つ忘(わす)れられ
 芦穂(あしほ)

盃(さかづき)へ亭主(ていしゆ)が注(つ)ぐミチトこぼれ
 東洋鬼(とうやうき)

岡(おか)惚(ぼ)をしたのに先(ま)へ一つさし
 太郎坊(たろうぼう)

盃(さかづき)が重(おも)なる度(ほど)に愚痴(ぐち)になり
 彩霞(さいか)

盃(さかづき)を指(さ)先(まへ)で廻(まわ)すだけの藝(ぎ)
 同

彈(は)き終(お)へた妓(き)へ盃(さかづき)が二ツ三ツ
 紫灯(むらさきあかり)

居(ゐ)酒屋(いざや)の盃(さかづき)洗(せん)に浮(う)く塵埃(ちんがい)
 同

盃(さかづき)を無理(むり)に舞(ま)妓(き)は受(う)さ、れ
 夢遊(むぎゆう)

盃(さかづき)の場(ば)でマダネシア音(ね)を立て
 同

盃(さかづき)を高(たか)ふに上(あ)げて叱(な)られる
 柳翠(やなぎすい)

模様(模様)ではないこ盃(さかづき)強(たか)ひられる
 同

取(と)次(つぎ)の盃(さかづき)年(とし)増(ま)の仲居(なこうぢ)なり
 一笑(いちごう)

鮮(あま)かに飲(の)んで旦那(だんな)に御返(ごへん)盃(さかづき)
 同

盃(さかづき)が銚子(ぢょうし)に付(つ)て上(あ)にあけ
 同

思(おも)ひざし藝(ぎ)者は心(こゝろ)よく受(う)る
 溪花坊(せいかぼう)

盃(さかづき)洗(せん)が未(ま)だ來(き)て居(ゐ)らぬ手(て)を叩(たた)き
 同

盃(さかづき)焼(や)へ箸(はし)盃(さかづき)は置(お)いたまゝ
 同

盃(さかづき)を受(う)る手(て)付(つけ)を藝(ぎ)者(しや)褒(ほ)め
 同

料理屋(れいりや)の名(な)は盃(さかづき)の底(そこ)に入れ
 同

罰(ばち)盃(さかづき)に世話(せわ)方(かた)一つ立(た)つて舞(ま)ひ
 同

一人(ひとり)飲(の)む盃(さかづき)に字(じ)の多(おほ)いこゝ
 同

盃(さかづき)を仲居(なこうぢ)早(はや)速(すみ)返(かへ)すなり
 左馬樂(さまがく)

見(み)た事(こと)が小(こ)かいふ妓(き)に一つ
 太郎坊(たろうぼう)

催促(さしづ)をされて盃(さかづき)一つあけ
 一笑(いちごう)

盃(さかづき)は先(ま)づ旦那(だんな)から旦那(だんな)から
 東洋鬼(とうやうき)

半(はん)ばき母(はは)盃(さかづき)へ賞(あ)ふなり
 溪花坊(せいかぼう)

互選(ごせん)

親友(おんなづ)の噂(うわさ)を知らぬ顔(かほ)で聞(き)き
 琴月(ことづき)

髮結(かみむす)で聞(き)いた噂(うわさ)を女房(にようぼう)言(い)ひ
 城雨郎(じやうあめら)

噂(うわさ)から亭主(ていしゆ)は留守(くわい)が氣(き)にかゝり
 紫灯(むらさきあかり)

幕降(まくふり)りて今(いま)の噂(うわさ)を後(あと)でしい
 太郎坊(たろうぼう)

資本主(しやほんしゆ)早(はや)くも噂(うわさ)耳(みみ)にする
 柳坊(やなぎぼう)

噂(うわさ)だけにしておきたい二人(ふたり)なり
 彩霞(さいか)

冷(ひや)つやりささせる噂(うわさ)を聞(き)て來(き)る
 一笑(いちごう)

珍らしい噂を二人から聞き 夢奇痴
ちむごい噂を家主聞いて来る 古城山

○

取付の噂認めのおれぬこ 琴月
近所での噂養子も無理があり 南耕
問題にならぬ噂聞き乍ら 一笑
噂なこせられて見たい食客 左馬樂

騎馬巡査 高橋古城山選

行列を押し返す氣の騎馬巡査 東洋鬼
御渡りのいづち後から騎馬巡査 柳坊
醉漢を尻目にかける騎馬巡査 左馬樂
人民を口下けて通る騎馬巡査 芦穂
騎馬巡査小火でよかつた所へ來 溪花坊
夕立ちになつて巡査は馬を下り 城雨郎
混雑を二つに分ける騎馬巡査 夢遊
退屈に野原へ廻る騎馬巡査 左馬樂
騎馬巡査避ける女を見て通り 溪花坊
教習所から騎馬巡査町へ行き 一笑
軒燈の竝に摺れる騎馬巡査 芦穂

騎馬巡査下るこ何が事故があり 溪花坊

騎馬巡査沈む夕日に延び上り 東洋鬼
騎馬巡査國旗が顔へ觸るなり 琴月

紅

本田溪花坊選

口紅をつける舞妓に灯がこもり 彩霞
虫干に紅絹の蒲團は暮のやう 柳坊
紅さしてゐるのへ姐御せかと來 同
ナフキンに口紅ついて落るなり 一笑
鉛細工矢鱈に紅で彩ざりたて 枝郎

よく喋るのに口紅の削けもせず 東洋鬼
唇を小さく見せる紅をさし 東洋鬼
鏡かけ指についでる紅をふき 同
紅皿は新の中から底が見ぬ 夢遊
引伸ばし口紅變な色に出る 芦穂
紅少しつけてお稚兒の老けた供 琴月
口紅をつけて少婢は笑はれる 古城山
口紅へふこ悪智恵が浮ふなり 同
(人)口紅をさして横に湯がたり 柳坊
(地)口紅をこも衣裳附に暇が要り 輝翠
(天)揚幕のこもで口紅見て貰ひ 芦穂

宿題「素見」

麻生路郎選

厚司着て素見かす客へ逆らはす 柳坊

素見の下足も同じ手間がこれ 輝翠
素見は肩こ肩こで摺れ違ひ 芦穂
心安そうに素見して値をたづね 南耕

素見は理價を知てるやうに言ひ 琴月
素見がつけてこまれる俄雨 同
先客の素見も出たこであひ 同
素見してまけられて困るなり 彩霞

誘はれた方に素見金があり 紫灯
素見ご知りつゝ亭主世辭がよし 一笑
素見が寫眞へむごい捨言葉 同
素見され素見されして賣るる 黒灯
素見ご客ご同じ窓により 左馬樂
一本の傘で素見四人伴れ 城雨郎
ふくろべを素見咎られもせず 古城山
もう年か年だき娘素見かされ 眠聲
素見しん來て新店の賑やかさ 黎明
素見を見て股火から立ちもせず 溪花坊
素見を馬鹿にしてゐるに咲き 同
素見を娘騙蝠傘でうけ 花月
素見を素見にせぬ友に會ひ 冷笑

素見は友を呼びく逃けて居り 同

船の出るまでを福原歩いて來路郎
ひやかしの職人さまに見ゆまが同
福原で宿の浴衣をほころばせ同

第十二支部例會

四月二十日午後六時半より函館市恵比
須町事務所樓上下第二回支部例會を開
催した。出席者は二十名。千波、柳友
夢之助、喜多坊、ばん蝶、八郎兵衛、
一的、登天二、東魚、二三吉、凡哲、
羽衣草、一樹、荷風、利喜馬、潮三郎
六步醉、香三郎、花童子、三津蜂(花
童子報)

席題「着物」 互選

死んだ子の着物に母は涙ぐみ 香三郎
裾を蹴るやうに白足袋ちぎ急ぎ ばん蝶
刑事部屋んな着物で今日は來る 夢之助
唐棧さ見て呉服屋は振り返り 花童子
手織縮その手さわりも親の恩 八郎兵衛
寢臺車一枚脱いで棚へ上げ 三津蜂
チト着物氣にして女椅子にかけ 利喜馬
好い着物見せに近所へ子が歩き 一三吉

年期明け光る着物が只嬉し 喜多坊
さつかつ三座る仕事着灰を立て 一樹
後戻りさす自轉車は裾を食ひ 柳友
同 「若」 夢之助選

まだ若いくミ煙にして仕舞ひ 凡哲
その筋の手で戻される若夫婦 六步醉
小間使若奥様の髪を直似 東魚
カッタ血の躍も若き日の誇り 八郎兵衛
口三味がはつきり藏に若主人 ばん蝶
お通夜の若手若手の輪を造り 凡哲
(秀)若い柄を氣にす髷を結び 東魚
同 「若」 東魚選

チト若く見られて女笑ふなり 利喜馬
カッタ血の躍も若き日の誇り 八郎兵衛
さうかなるだらうで親交遊ばま 一樹
(二点)半纏へ博多を締る若旦那 夢之助
華やかな悩みを追ふに窓へ立ち ばん蝶
(三点)亡妻の寫眞へ老た俺を見る 喜多坊
○ (舊作)
肉體のさこにも若さ輝けり 東魚
同 「悪戯」 三津蜂選
半玉を又も泣かして手を叩き 荷風

庭番は怒り疲れて笑つてる 潮三郎
お習字の最後は人の顔になり 凡哲
バーの畫も椅子をぐらつかせ 一樹
報知機はそれから強い物さ知り 柳友
いたづらに呑み煙草の味を知り 喜多坊
金魚を殺して姉を又泣かせ 香三郎
(人)石の音怒鳴るさ堀へま當り 二三吉
(地)雲河のまこペンキを塗り始め ばん蝶
(天)さんな物だも線路へ石を積み 羽衣草
同 「悪戯」 花童子選

刈落す床屋悪戯してるやう 凡哲
かつがれた事を知らない女文字 二三吉
仕込まれた子に小僧の悪ふざけ ばん蝶
こわされた物に笑ふも親であり 夢之助
黒板のボンチ通りに先生禿け 東魚
悪戯な言葉も浴びる最合傘 千波
叱られもせず千切れた花を見る 利喜馬
悪戯が過り泣かれた子に困り 八郎兵衛
手の届く限り櫻桃は熟らす 三津蜂
(二点)荷車の後へつなぐ三輪車 六步醉
(三点)合宿の違反坊主が一人出來 潮三郎

偶

感

森 東 魚

遅日莊主人の「自然の滑稽」を読んで大變嬉しかった。悲哀の圈に漂ふ滑稽味、滑稽の極り盡した悲哀、つく／＼人生の皮肉さを思はせる事は屢ある。話はチト古くなるが昨年の大震災の當時は全く此の感を深くせしめるものが多々あつた。

■自分は——確か市街自動車だと思ふ、まだ電車の回復せぬ時であつたと思ふ——ふみ其社内の廣告に目をやつた。それは、輕量金庫の廣告であつた「在來金庫之敵」を書かれた、文字は無遠慮にブツチ違ひの筋で消されてあつた。敵の字の上には、「不」の字が鉛筆で書かれてあつた。更に其傍に、「黒燒」を亂暴に大書されてあつた。私は思はず失笑した。黒燒クロヤケミ讀ませる氣であらう——何となく其字のおかしさ、金庫の黒燒——私は失笑を禁じられなかつた、然し直ちにかう思つた。かう書いた人は恐らく眞劍であつたに違ひない。信頼した、殊に能書きに信頼して買つて一時の安心を托す事の出来た金庫に忽ち堪もなく裏切られた不満と鬱憤が其廣告を再び見るに至つて爆發した結果に外ならない——と思ひやれば悲惨な事だ。

■父、同じ震災當時の事である。郡新聞の一欄に、燒トタンで固つた避難小屋に「小便所にあらず」を貼紙がしてあつた。云ふ記事があつた。往來の人が何の氣もなく小便をかけて行く、悪いとも思はずウカさうした事をして行く、云はば路次のごみ溜にも等しく考へられるやうな、みじめな一構は、其主人にまつては全家族にわづかに雨露をしがす唯一の安全地帯なのである「小便所にあらず」を張出した主人公の憤慨を想ふに、全く悲愴の極みだと思ふ。然し又「小便所にあらず」をあらはされた文字に何となく漂よふユーモラスな氣分に、微笑を禁ずる事が出来ない。「悲哀の中の滑稽」「滑稽の極まれる悲哀」かうした感じを自分はず／＼思はせられた、未曾有の大變事に直面しても、川柳味の脈々として存する事を認めずには居られない。人生に織こまれたユーモアを感得せずには居られない。

■南無女房乳をのませに化てこい——此の古句を久良岐師はよく口にされる友人清水華文君は不幸にして令室を失はれたさうして可愛い乳のみ兒が父の手のみに残されたのである。此の古句を口にして華文君は感慨にうたれて一語をもなさなかつた。

川柳は決して傍觀的に洒落たりしてゐる輕浮な世界ではない、微溫的な世界ではない。暗きをぬけ出で來つた明るみの世界である。眞劍の世界である。

(大正一三、六、一、稿)

募

集

句

別離

坂井久良岐選

試験期になれば離れを借るなり 松々
 出稼の離れぐに年が明け 六歩醉
 離縁する心で亭主飲み歩き 美濃守
 諦めて去る身に乳のはるつらさ 乾坤
 呼んでや事は知っても居るけき 政次
 村塚まで先生は見送られ 二三吉
 持参金今更離縁さも言へず 彌生
 靴音を聞いて別れる影ほうし 一洲
 逢ふは別れのはじめぞ知つた今 提象
 別離から丁度今年で三年目 助六
 別離から病の床に付きにけり 小人
 さうきめて置いて二人椅子を立ち 三拍子
 洋行の名残を惜しむ新聞紙 伯洲
 トンチルを出き別離は梨を食ひ 多聞
 別離して様な世帯に女飽き 一閑子
 出迎へたあの棧橋でまた別れ 眠聲

錢湯の戻り離別の妻に合ひ 廣賀
 別離してから盆栽の花いちぢり 零骨
 わかれても心一つは汽車の窓 小北溪
 錢別の外に窓から四合壺 巨頭子
 踏みしめる草鞋へ落ちる一雫 同
 猪口才な奴が別離の歌を詠み 盗泉
 別れ来てなき詠んだも一昔 同
 南米へ別離くになつて行き 琴月
 お別離を皆なにつけて嫁に行き 同
 道連れさ別れて畔の露に濡れ 句樂
 汽車が出て言ひ事と思ひ出し 同
 別離人へ皆んなの猪口が来る 順三
 別離した朝も雀の聲を聞き 同
 別離して母懐かしさ戻るなり 一笑
 別離する友に錢別握らせる 同
 校門を出る懐かしさ業を卒ね 徹底郎

趣味に生きる者

森田 輝翠

狭い家に住んでゐるKにさつて外出する
 云ふ事は無上の楽しみであつた。今日
 は活花の稽古日だ。トンビを引掛けてい
 つもの如く妻に外出先を言つてそとくさ
 さ家を飛び出した。
 彼が住んでゐる天下茶屋の家の周圍に
 は、ブル階級の住宅地だけあつて、宏大
 なる家を取りまいてゐる。さすがに上流
 の家柄ばかりなので腕白小僧一人街路で
 遊んではゐない。Kは人通りのない幾筋
 かの辻を曲つて北天下茶屋の停留場へ來
 た。埃き手垢きで眞黒になつてゐる待合
 所に入つて電車の來るのを待つてゐるが
 容易に電車は來なかつた。待合所には乗
 客が一人殖へ二人殖へして十人あまりに
 なつた。氣早い人はボチ／＼呟きはじめ
 た。ブラットからは云ひ合した様に首を
 突出して電車の來る方を覗き見るのであ

この次の日曜までの別れなり
今にして見れば別離の寫真なり
卒業の涙別離の涙なり
別れねばならぬ因果の種を蒔き
別離の宴一月光はきつて射り
仲を裂く様に別離へ汽車の笛
盡させぬ別離へ汽車乗りおほ
口笛にまた振り向いて帽を振り
別れ際春中たくは初手の内
別れ際煙草一本つけて呉れ
せめてもの心餞別送るなり
慰めて貰ふて辛い別れなり
氣が折れてから復縁を迫るなり
同 狂水
同 百石
同 月の輪
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同

お渡りを二階に拜ひ病み上り
一判を下へ頼んだ二階借り
梯子まで二階の師匠送り出し
二階だけ一軒高い町はづれ
物干へ仰山置いた二階借り
二階から見下してゐる貸浴衣
久樂
同 狂水
同 百石
同 月の輪
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同

二階

別る、口頃の馬鹿が泣き止む
何も言わずむづき手を探る別れ
峠まで生徒長蛇をなす別れ
先生の別れ女生が泣くばかり
久良岐評
あんまり、佳吟に乏しいので多少失望し
ました、題が川柳的長所を含んでゐない
爲めもありませうか、人情さ云ふ物は單
純で月並の成り易い爲めあらうか
思ひ外、所て全体を及第点それも五十五
点位の所として別に、甲乙の差別を付け
ません一体三才の点を付ける事が、月並
俳句の所産で有つて初代川柳の、選句に
はない所であり外、随つて川柳には選者
吟もありません、選句其物が詩の標準に
合格すれば選者の目的と責任は達した
譯であり外。

三味線の音もさきくする二階
二階借少し氣兼ね火をおこし
二階から見れば浮世が小うるま
お二階へ見た事のない女客
不寝番一階の音を寂しがり
二階では親爺一人の駢なり
久樂
同 狂水
同 百石
同 月の輪
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
同 同

吉本寛汀選

る。丸い顔角い顔、少女の顔、婦人の顔
それ等の色々雑多な顔が交互に突き出す
のを見てゐるKは微笑せずには居られな
かつた。彼れは四十五分位待つたと思ふ
頃、皆の前に電車は止まつた。
待ちわびてゐた人達は先を競ふて乗
りかけた。Kも其中に交つてよう／＼車
内に入る事が出来た。電車に乗るまで、
生存競争をせなければならぬ、此の世
の中を苦笑せずには居られなかつた。
Kは吊皮にぶら下つたものゝ身動きも出
來なかつた。無論空席のある筈はない。
Kの立つて居る前には四十二三の丸鬚
の婦人さ、二十歳前後の青年さ、わが
もの顔に廣く席を取つてゐたが、別に席
を譲り合はさうともしなかつた。
電車の中の混雑が耳にも入らぬのか青
年は一心不亂に手にした本を讀んでゐた
Kは此の二人を凝視して自分の横に居る
吊皮にまだ手の届き兼ねる少女に席を譲
つてやればよいのにと思つた。席が無か

二階借米屋を連れて歸つて來 徹底郎
 段梯子此の二階には大きすぎ 伯洲
 許嫁軽く二階へ上つて來 三拍子
 もう子供二階の人に馴れて居り 廣賀
 二階借電氣の球を替へて出る 柳也
 御飯位買ひに降りる二階借 琴月
 都山流指南さ出した二階借 一休
 二階借預けられてる氣味があり 一柳
 激論が果て、二階は豆を噛み 寸馬
 二階、出かける夫婦下駄を提げ 一笑
 エプロンを女給二階の窓へ干し 夢遊
 二階借古着店ほぎ吊つて置き 句樂
 お向ひの二階を二階から覗き 同
 お二階へ實印の要る用が出来 柳骨
 お二階へ昨夜の出前取に來る 同
 二階借同志でシヤンの話なり 盜泉
 お二階は山入れてから時が立ち 同
 二階から糊付けものを先に投げ 順三
 父親が二階へ呼んで言聞かせ 同
 お二階の人へ娘の氣が變り 助六
 二階からゆつくり降る日曜日 同

お二階を起して火事を見て貰ひ 藍之助
 二階から好いを見ま笛を吹き 同
 お二階は豆腐の撃拭かされる 多聞
 二階から雨を見てる痛い胸 同
 二階借みしりくミ床を揚げ 狂水
 小包が届いて二階起される 同
 妾宅の二階に無駄な灯が點り 零骨
 蚊取粉の二階に風があるらしい 同
 二階から欠伸になつて降て來る 一閑子
 今晩のお客に二階狭すぎる 同
 看板をかけて二階を全部借り 同
 何事か計畫を持つ二階借 同
 二階からはつきり見へる東西屋 輝翠
 置床へ二階は今日も活けてゐる 同
 ちみ資本足りず二階に狭く住み 同
 二階から隣の庭を汚ながら 巨頭子
 蚊帳だけをはずして二階開き也 同
 裏二階明けつ放つて涼しすぎ 同
 (五客)結納も済して二階片付る 少女櫻
 問詰て見れば二階に居るさ云ひ 徹底郎
 屋根ばかり見へ二階を安く借り 六步醉

つたら仕方ないけれ共無理さへすれば一人位は腰をおろす事が出来るのにさKは憤りを感じながら彼等をながめてゐたが、二人は素知らぬ顔を續けてゐた。少女は相變ず吊皮にブラ下つてゐる。電車は急速力で今宵の坂を上つて行つた、丁度秋の茶屋へ着く頃平野線の、ポイントの上を通過した際に、電車は急激な動搖をした。其時吊皮にブラ下つてゐた少女はさうした機いか、吊皮に下つた儘ぐるつこ一廻りして二人の間へ倒れた。

「踏躓いた人へシートに席が出来」

其の拍子に少女の腰掛けるだけの席が二人の間に出來た。Kも安心した。惠美須町で降り市電に乗換へる時でも彼等二人の事が氣にかゝるのでKは注意の眼を離さなかつた。丸髭の婦人さ青年は市電の北行に乗つた。何處まで行くのだらうと思ひながらKも二人に續いて電車に乗つたが、偶然にも彼等の横に席が空いたのでKは青年の横へ腰をおろした。婦

一階借でもご世帯を急ぐなり 琴月
 一階から抜たを刑事問詰める 輝翠
 (人)戀猫を本氣で脅す二階借 多聞

辭 職

古 城 山 選

眼の上の瘤が辭職をして仕舞ひ 寸馬
 辭職して讀む新聞のつまらなさ 順三
 もう孫に嫁が來ますご職を辭し 三拍子
 大望を抱き 青年會を辭し 柳也
 辭職して定期豫金へ手をつける 巨頭子
 病床記辭職のこころが目にさまり 一洲
 辭職して悠々閑地に就くつもり 百石
 辭職してからは小さい趣味を持ち 一柳
 小使に迄惜まれ また人は引き 少女櫻
 此格子外すゝ決めて 辭職する 助六
 恩給が漸くついて 職を辭し 香氣坊
 辭職して郷里の土に親しむ氣 久樂
 辭職して閣下無言のまゝ暮し 狂水
 浪人が香氣だご云ふ職はなれ 二三吉
 先生の辭職は養子ご決つたり 小人

高橋古城山共選
 吉川 嘸人共選

退職の手當辭職に不服なり 一笑
 言ひ過が遂に辭職のもこになり 双柳
 圓滿な辭職のやうに云ひふらし 盜泉
 辭職する氣の交抄はよく應へ 輝翠
 辭職してからの心算がまた爲り 多聞
 女房へ辭職ご決めて 打あける 月の輪
 辭職した事を薄々女知り 一閑子
 いゝ口があれば巡査を止す氣也 句樂
 (五谷)タイピスト辭表を出て素見れ 柳路
 辭職して見るご子供が多過ぎる 多聞
 辭職する様に傍から仕向けられ 不越
 辭職した譯を伯父さん褒へ呉れ 六步醉
 辭職してからの景氣が氣遣はれ 輝翠
 (人)素つ張ご辭職をしたご困り 徹底郎
 (地)辭職してから待遇のよい噂 夢遊
 (天)辭職して見れば女に裏切れ 王魔遍

人ご青年は何か話合つてゐた。初めて親子である事が判つた青年は鬻大の角帽を被つた水々しい青年である、Kは盗み聞する積ではなかつたが、川柳について話合つてゐる事が耳をその方へ向けしめたKは先刻の慣態から親しみへ心が變つて行のを感じた。青年は例の本を出して頁の中程を開いて何にか言つたかと思へば突然二人は笑ひ興じたのである。Kが横を振り向いてその本の方を見るに川柳が七八句並べられてあつた。

最近の柳誌

▼大正川柳(一四〇) 所謂關西調の討檢に就て(島田雅樂王) 其他東京市外高圓寺一千番地柳樽寺川柳會▼手向草、京濱震災横死川柳家追悼詠草句集▼大大阪(一ノ四) 百萬石の城下にて(本田溪花坊) 大阪市北區老松町其社▼忽路函館市惠比須町函館川柳社▼よのころ(二五號)川柳七不思議(西原柳雨) 岐阜市元町二丁目よのころ社▼群像(第三卷四號) 酒田町濱町其社▼氷原(十) 森田森の家論(

辭職してからは朝寝の癖がつき
 辭職した閣下無言のまゝ暮し
 總辭職軟化が半分交つてる
 ストライキ會社側では二人退き
 辭職したこゝを知らない國の母
 恩給と同時に辭職提出し
 一言目何時でも辭職口にする
 辭職して妾の家が假事務所
 榮轉ミ見へて辭令は辭職なり
 先生の辭職養子こままつたり
 宴會の席で辭職を發表し
 病人にしてから辭職せよといひ
 辭職したあこへ次席が腰を据ね
 しんみりミ辭職を思ふ朝の風呂
 辭職して前垂掛の氣の樂さ
 やめるまで何も言わぬ氣で務め
 突然の辭職檢事の眼が光り
 號外はもう總辭職ある時分
 恩給を當てに辭職はしたものゝ

彌生 狂水 美濃守 松々 末廣 助六 双柳 一洲 薰流 小人 小北溪 提象 六步醉 多聞 呑氣坊 伯洲 徹底郎 眠聲 柳骨

肩揚がおりるこやめる交換手
 辭職とゆうく閑地に就く積り
 懐に辭表を入れて氣が強い
 ちこ小金貯めて辭職は店を出し
 辭職する事は女房もまだ知らず
 御主人へあいそつかした辭職
 辭職せず居たらミ思ふ十年目
 圓滿な辭職のやうに云ひふらし
 辭職してからは小き趣味をもち
 女房へ辭職さきめて打ちあける
 よい方でありました後沙汰
 辭職して郷里の土に親しむ氣
 もう孫に嫁が來ますミ職を辭し
 恩給もついで辭職は國へ去に
 草履ぬぐ様に辭職をしてしひ
 辭職した當座書齋を片づけける
 辭職した人の噂が未だ残り
 硬論の裏に辭意が堅かつた
 (人)言ふ丈を云ふ辭表をつくる
 (地)辭職と定期預金へ手をつける
 (天)タイピスト辭表を出て素見

句樂 百石 二三舌 夢遊 柳也 琴月 一休 盜泉 一柳 月の輪 少女櫻 久樂 三拍子 順三 寸馬 一閑子 輝翠 王魔温 句樂 巨頭子 柳路

田中五呂八)小樽市稻穂町東一川柳氷原社
 千兩箱(大連 大阪南同心町二其社)▼番傘大
 阪市南区玉屋町其社)川柳銚鉢(名古屋)
 白頭茶)ホネツホ(宇和島)▼新柳樓(江別)
 ▼椎の實(神戸)▼はこやなぎ(大阪)▼擬寶
 珠(京都)▼やなぎの芽(小松町)▼頰杖(松
 江市)▼千里十里(廣島)▼みちのく(黒石町)
 ▼あけぼの(平壤)▼川柳はま(横濱)▼一步
 (函館市)▼櫻柳(東京)▼てつべん(東京)▼
 第三回)全國川柳名句番附選句集(札幌市)



古川柳研究家として有名な西原柳雨氏こ
 岡出三而子博士合編の

川柳涼舟

を次號に掲載いたします。本稿は特に本
 誌愛讀者のために寄せられたものであり
 ますが一般川柳家にとつても有益な文字
 であります。御一讀を煩はします。



句になる迄(二)

— 添削改作句稿より —

遅 日 莊 主 人

バナナ屋の先づべらほうな値を申し
露 溪

川柳が巧くつくられるやうになるためには、出来るだけ多くの句をつくらねばならぬ。出来るだけ多くの句を読まねばならぬ。

初心者の句稿を見てゐるに、同じ場面句が四句も五句も列んでゐる事があるが、これは作句上いゝ方法であるが、その四五句の中で、されかが一番いゝ句でなければならぬ。それを自分で選り出して見る必要がある。みんな投句しておけば、されか抜いて呉れるであらうさいふ調子では、何時までたつても巧くはない。多く讀むにしても、濫讀は何んにもならない。故人の句、先輩の句を熟讀して句の生命が何處にあるが知らなければならぬ。

今一ト息の句である。「バナナ屋の」は「バナナ屋は」にした方が句が一段と引しまつてくると思ふ。しかしさう改めて見ても大した句にはならぬ。これは「値を申し」が、バナナ屋にピッタリ合致しないの、も一つユーモアが足りないさいふ缺點からであらう。芦穂氏の「寶石屋唯無造作に値を申し」の輕妙さをよく味はふべきであらう。

落籍れて堅氣さいふが辭になり 露 溪
巧である。その人物が躍如さしてゐる

- (一) 珍石を拾ひ歩くは 藥喰 少女樓
- (二) 落慶の記念扇子が配らるゝ 同
- (三) 十八九思案の外のもの思ひ 同

この作者は、時々いゝ句を投じて來るが、この添削改作欄への句稿はこの欄のための試作であるやうに思へるほゞ、いつもの句とは違つてゐる。(一)(二)の句は、俳句を作つたあとで作つた句である。作者は俳句もつくる人ではあるまいか。内容なり、調子なりに其の片影を見るこゝが出来る。(三)は全く川柳の調子になつてゐるが概念で詠んだ句で生命がない。

- (一) 心配も知すこきもはいぢるぢ 小人
 - (二) 猿股の紐に困つた辻便所 同
 - (三) 金持は出来てくる程けちに 同
- (一)の句は巧である。無理に難を云へば少し云ひ足りぬ點がある。(二)は作者の實感かも知れぬが、由來辻便所なさを詠んだ句で佳句に接したこゝがない。よくよく考ふべきであらう。(三)の句はあんまり勘定が合ひすぎるのが缺點、所謂「その通り川柳」である。もう少し餘情があつて欲しい。



溪花莊にて

塚崎松郎

路郎さん、月がなんじかの昨日の曇天も到々雨になつてしまひました。晝前から五月雨しきり降りしきつゝゐて何だか居續氣分に浸つてゐるやうに感じながら届いた『川柳雑誌』を讀んでゐます。老松町の溪花莊で寢轉び乍ら……丁度幽香が來てゐて今去んだまこなのです。今迄莊主三人で雑談の揚句、『川柳雑誌』のあなたの句を交るゝ批評したのです。そ

れを書いて送らうか云ひ合ふたのが時間が悪いのでその儘になつて幽香は歸りました。降りしきる家外の雑音をき乍ら莊主は轉た寢をしてゐます。路郎さん『川柳雑誌』の四號を見もつて行きます。例の巻頭文『時事吟に就て』は流暢にあなたのカラーが出てゐるのが嬉しいものゝ一つです。斯う云ふ文章はさうしてもあなたの畑ですね。『川

柳雑誌』の價値は何時もあなたの巻頭文に大半をしめてゐるに云つても過言では有りませう。あなたの近作に私は何時も乍ら教へられる點が有りました。けれどもかうしたのが本號のは「のみに來た友に家賃をきかれて居」以外はみな何時もの私の期待が外れたかのやうな句と思ひます。本號發行前からの「同人一家」病魔に書かれたやうな事故の爲充分創作の暇が有せられなかつたからだと思つてゐます。之はあなたにしてみても御同窓の事と思ひます。而し著想の暇ひきこは矢張り老練さが表れてゐて、到底私等の追従が許されぬどころです。近作柳樽に大阪の相當古い作家の投吟が無いのを遺憾に思ひます。それに反して地方の健吟家及び大阪の新進作家はみなこそつての熱心が嬉しいのです。之等の作者達の何日迄もこの熱の冷められないやうに、大家ぶらずに未來の選者たる事を夢に見ず、死ぬ迄作家として何處迄も良い句を見せら

れん事を希望したいのです。やがて、選者になつておさまつて終ふこともう其人達が良い句が吐けぬやうになるものです。私達はお互ひにまだく作句の研究に年寄つて行きたいものです。

路郎さん、近來の雑誌を見て、雑吟課題の投句が或一部の新進作家のみに限られてゐるやうで、古い作家は何處の雑誌にも餘り散見せないのは心細く、悪い傾向では無いでせうか。何日の間にか募集吟に投句する事は一種の體面に係るかのやうに思ふ人達が多い傾向になつてゐるやうに見えます。昔の雑誌はみな募集吟が盛んですの私にはうらやましく、見ぬ懐かしさを覚えます。今もし新進作家が無かつたなら各雑誌社の募集欄は白紙で成つて終ひませう。古い作家達に、昔取つた杵づかを持つて各雑誌の募集欄を白紙に終らしむる事の無いやうに謹んで松郎が茲に希望する次第です。

路郎さん、元に戻りまして「句になる

迄」の中に一休君の「病人に知らさぬ工面して戻り」改作されて非常に良い句になりました。引締つた調子云ひ生々とした着想、寂し味に餘情の有る立派な句で本號の句の中でこの句に肩を並べるものが無いでせう。紋太氏の「病牀にて」を讀みて私はこの文章の骨髄を抱締たいやうに思ひました。そして紋太氏の恢復を心から祈りました。

稻荷祭り等の小集會の句はみな良い句が多く、殊に家主の句は全部共鳴致します、敬服。小集會に於ける一般の句は各社共關西のほこりです。無線放送はもう少し眞面目のこともつたおさけ文を揃へて貰ひたいものです。川柳塔の句はみな位が揃つておつて結構です、同人諸君の向上は火が走るやうで作句に對する熱に併せてあなたの苦心が表はれてゐます。川柳雑誌の同人諸君へ、識見有る先輩路郎氏を頼り益々努力されて川柳塔の光を社會にほこつて下さい。そして作句餘力

を他誌に飛ばし關西川柳界を諸君達に依つて擔はん意氣を示されるやう切に期待を俟つものです。

路郎さん、到々こんな事を書いて終ひました。雨はまだ盛んに降續いてゐます。灯つた電燈へ向きを變へました「雨の音を聞いて寝てゐるに好い具合だな」寢返りをした莊主の溪花坊氏はこんな氣樂な事を言つてまたスヤ／＼とやつてゐます。多分柳多留堀出しの夢でも見てゐる事です。

路郎さん、私は今日こんな空想の理想を持つてみました。それは斯う云ふのです。大阪だけでも各社でもつて大阪川柳協會のやうなものを創立してその協會より第一に「選者」たる資格を公認する云ふ事なのです。何故斯んな事をするのかは賢明なるあなたの御判断に任せます。尙第二第三の目的はまだ考へてゐません。只これだけです。もつと申上りたい事が多山ありますがまたお目に掛つた時に譲ります。(十三、五、廿四)



川柳塔

龜井花童子

葉櫻へ来て物足らぬ顔で呑み
何時も来る八百屋の聲を丁稚真似
朋輩のよしみ元結二本借り
その邊で探せば判る丈けを聞き
平常着を買ふて呉れるも夫であり
淺ましい心を起す小間使ひ

○ 森田輝翠

これにする柄まで女暇が要り
炎天の中に尊い汗をかき
今頃には女海遊を行く夫
今去んだ妾話の種にされ

川柳書架 (二)

川柳膝栗毛

(西原柳雨著)

▼例によつて、著者の『自序及凡例』を轉載して見やう。

『本書の目的は旅行記に擬して古川柳を分類排列し一は以て狂句趣味を鼓吹し一は以て嬉笑遊覧の間に地理歴史の一斑を知らしめんとするに在り。

故に各國の名所舊跡大社巨刹風俗習慣言語物産等は勿論古戰場及び偉人豪傑に關する史傳逸事等は正俗を問はず出来る丈その多くを網羅せり但し全く同類なる類句は多少省略せり。

江戸及其附近に屬する句は饒多にして汗牛充棟も當ならずされば別纂に期して此篇に加へず。

篇中難解の句少からず雖も位置より考へ前後の類句より推さば自ら了解すべ

見損ないするなき弱い方が去り
呉服屋の前で亭主は先になり
畔草をなびかせて居る風の波
茅の中漕いでるらしい竿が見

○ 岩崎柳路

あかさねぬ藥丁稚を買ひに遣り
安心をさして面會歸るなり
停電に今の話はそれつきり
病上りコーヒ茶碗の手がふる
藥瓶蟻一匹を見付け出し

○ 酒井零骨

仁丹が轉ぶ座敷の青疊
もう閣下主治醫に話す様になり
何も彼も天井にうつる試験前
俠氣を出すに女房に叱られる
注射器がまた看護婦の手に戻り
お馴染の方へ仲居はちあわて
嬌曳を犬も一度ふりかわり

きもの多かるべし由來難句なるもの分類
其方を得排列其當に適へば既に難句にあ
らざるものあり。

一句にして數ヶ所に跨るものは適宜關
係深き所に収録したり。

元來川柳の狂句は寫眞叙景等の小數を
除き多くは寓託あり表裏ありて第一義こ
第二義は全く意味を異にせるを常とす
されば半面に史的寓意を含めるもの若く
は故事に胚胎せるものは参考句として收
録し句頭に○印を附せり。

淫猥不敬に亘れる句は務めて収録する
ことを避けたり。

彼我對照の便を量り卷尾に索引を附せ
り。

著者素より川柳に對する造詣淺く況ん
や僻地に住して參考書は勿論柳書を得る
こと甚だ困難なりされば原料の貧弱なる
は其分として只偏に誤解錯列多かるべき
を恐るゝのみ同好の士幸に指摘垂針の
勞を吝まるゝことなくば幸福何物かこ

もさからの仲仕ではない文字を書き
枯すゝき唄ふて二人二階借
値を聞いて終つても心の懐
橋詰へ来るさ火の手は遠くなり
ミッ豆で旦那堪忍して貰ひ
落籍された當時常着に困るなり

おしぎりの波が岸まで届きかね
たきたての様に莓を食べて居る
鯉幟素直になびくうららかに
○ 太田徹底郎

母上の眼へプロペラの音ばかり
考へをまよめる爲めの顔を伏せ
ほんさうに寝たのさ毒婦立ち上り
ペン先が乾いてもまだまさらす
こざりさもさせず市松の髪を抜き
取り直す機嫌子供の方へ向き

れに如んや。

柳友室井一八藤田寶船の二氏遠く東京より柳書數十卷を貸與して此編の材料を供給せられたることを附記して特に感謝の意を表す」(大正二年三月西原柳雨識)

▼更に目録を覗いて見るこ

序編、第一編東海道、第二編京都附近
第三編大和紀州巡り、第四編中國四國
九州、第五編中仙道、北越、甲州街道
第六編奥州、常總地方

▼大正二年九月五日發行。菊版半裁四四二頁。定價金七拾五錢。東京市日本橋區本町三丁目博文館發行。

▼目的が目的であるから川柳狂句の混記はまぬがねぬが、古句を知る上にはいゝ本である。著者は川柳研究者として定評のある人。

やなぎ樽評釋

(沼波瑛音著)

▼この著の凡例には

「本書は全く川柳の味を知らざる人に川柳を説く態度にて書きたり。」

正ただ直ただのもてぬ廓ミ覺わたり
經つ験つによれば上う下げのへだてあり
○ 太田 一聲

虫むしのいい事ことを云いつてる母ははの前まえ
不ふ景けい氣きは乃すなは木き式しきにする家いへミなり
花はな包つつみ提たげて床とこしい歩あみ様
驅か落おが浮う世よの狭せまい事ことを知しり
誘よはれて引ひくお神かみ籤せんは吉きちミ出る
母ははが來きてかくす手て紙しの長なが過すぎる
週しゅうり道みちして食く券けんで腹はらが出來き
○ 西垣 松雨

俄いつ雨あめ一ひと尺せきの軒のき見みて走はしり
痼こ症しやうが今いま日ひも吹ふ鼓こ燒やいて去さる
立たっ志し傳でん彼かも人ひとなり俺おれも人ひと
縁えん日ひの植う木きに道みちを替かへて去さる
受う付けへこういふ字じだき指さで書かく
開ひいた口くちそのまま喜よろこ劇げき幕まくになり
○ 武田 彩霞

信しん用ようをされて不ふ安あんな金かねを持ち

二柳にやなぎ樽づ原はら書しよにある序じよ文ぶん其他その他川かわ柳りゆうに
あらざるものは總すべて省はぶき、川かわ柳りゆうのみ
を評ひやう釋しやくする方かた針はりなり。

三本さんぼん書しよは柳やなぎ樽づ初はつ編へんの部ぶをも終おらずして
豫よ定ていの頁へい數すうに充みちたり。されきこれ
より簡かん單たんなる釋しやくをなしては第一だいいちの目め
的に背へき、これより厚あつき書しよを刊かん行かうす
するも不ふ便べんなれば、先まづこれだけ
一ひと冊さつし、逐しゆ次じこの續つづきを書かく積つり
なり。

四柳しやなぎ樽づは、書しよによりていろろくくに綴つづり
あり、故ゆゑに定さだまりたる順序じゆんじよあらず。
もこより順序じゆんじよに意味いみあるにあらねば
本書ほんしよの句くの順序じゆんじよも余あまの執筆てしつの都合ごうご上うへ
出來きたるものなり。但たゞし索引さゆんを附つし
置おきたれば、それにて此書このしよ中の句くは
檢けん索さくするを得え。

五ご猥わい褻せつと認めらるゝ句くは一切いっさい省はぶきたり
六柳むつ樽づ初はつ版はんにありし句くの、重じゆう版はんの折せつ他た
の句くと變へんり居ゐるものは、兩りゆう版はんの句くを
共ともに出だし置おきたり。

考へもつかず男は膝を立て
 女房の智慧を見詰る日の永さ
 若旦那舞妓へ要らぬ智慧をつけ
 ちみ酔ふて柱鏡へ立つて見る
 怒つてる女房飲ます食はずに寢
 長火鉢匍ふて來る子に聲を上げ
 うつかりさ尻からけす嫁の親
 麥藁帽の轉がる先に水溜り
 院長の髻に子供を持てあまし
 團體を素直に遁す灯がこもり
 繪日傘をさして女將の用が出来
 鉦前をも一度試す長い留守
 好い天氣ステツキ軽くくまひ
 戀をする女を見ぬ肥り様
 如何しても癒るさ廣告書いてあり
 拳骨の眞似を犬だけ知つて居り

橋本二柳子

高橋古城山

七邊に解くを得ざりし句は卷末に列べ
 て、識者の示教を仰ぐ事としたるが
 評釋したる句に就ても、誤解を思ひ
 給ふものあらば一々吐正を賜はらむ
 ことを、謹みて江湖諸賢に乞ひ置く
 八井卯木氏、其他諸氏の著書の爲に
 数へらるゝ所甚だ多かりしを感謝す
 又、幸田露伴、坂井久良岐、梅本高
 節等諸賢より特に示教を賜はりしは
 著者の深く感謝する所なり。

▼初版は大正六年十月二十五日再版同二
 十八日三版七年二月五日、菊版半截三四
 九頁、定價金九十五錢。東京市下谷區池
 の端茅町二丁目十四番地、南人社發行、

▼解釋に加ふるに上註あり、初心者の一
 讀すべき書である。

お願ひ

本誌の購讀者を一人が一人お頑やし下
 さるやう川柳家諸氏に御願ひ申ます。

(宣傳部)



編 輯 後 記

てゐた。その他澤山あつたが、大てい想像のつくものは一々訂正するこゝを見合はした。しかし、句で間違つてゐる場合には遠慮なく通知して貰ひたい。

◆「襖」の句(前號、二十一頁)

開け閉めの襖に娘らしくなり 學遊
間貸して合の襖は開けられず 同

の二句は夢遊氏の句である旨通知があつたので訂正する。

◆本號へは東京から森東魚氏の「偶窓」大阪から塚崎松郎氏の「溪花莊にて」神戸から相元紋太氏の「作家として」の寄稿があり社中輝翠氏が「趣味に生る者」を書いた。

◆前號所報の同人一家の病魔は、本號の同人吟にたゞつた。一日も早く健康が恢復して大いに健吟を競ひ小生をよろこばして欲しい。小生も今月は「近作」を發表するこゝが出来なかつた。

◆西垣松雨氏も、岩崎柳路氏も退院してくれた。

◆宗清夜調氏は吳へ落ついたので、同地の俳人その他へ川柳の宣傳をするこゝ云つて来た。捲土重來をのぞむ。

◆宮内一洲氏は妹さんのお芽出度で多忙だ云つてゐた。それに武田彩霞氏も病氣で休んでゐたので神戸の五月例會は出来なかつた。

◆橋本二柳子氏はお國の兄さん(女學校の校長さん)が女學生を連れて大阪へ見學に來られたので案内役で忙かしくしてゐた。

◆添削改作の句稿は「句になるまで」の中へ發表すべからさしく送られたし、單に短評にミッまる句のあるこゝも御諒解を乞ふ。

◆柳川洲馬氏の句が見ぬぬので大向ふからさうしたくさ聲がかゝるので云つてやつたら近頃商賈督をして忙がしいから駄目だ今に見るこゝ云つて来た。

◆今井卯木氏が「俳風柳檣拾遺」を近く刊行するさうだ。柳書の乏しい柳界のためにもこゝによるこゝばしいこゝだ。(路)

◆前號は誤植が澤山あつて閉口した。出來上つて来た雑誌をジツミ眺めてゐるに腹立しくなるほぎ誤植がある。しかし、前號は病中の僕を引ずつて大阪まで校正に出かけさしたのだ。かすむ眼に飲まず食はずの一日、満足な校正の出来なかつたのも無理はないと思つてゐる。

◆募集句「叔父」の選者、相元紋太氏の名が特に小さな號數になつてゐるのが何だか意味があるやうに見えて面白くなかつた。第十支部小集が第十一支部になつ

キリンビールの一杯は

人生を愉快にいたします

晩酌に宴會に御愛飲を!!

東區平野町四丁目

明治屋大阪支店

| | | |
|------------------|---|----|
| 早暮にビールをついだ好い娘 | 一 | 秋坊 |
| 立飲みの荷物ビールに重た過ぎ | 零 | 骨 |
| 拍手の方へキリンビールの栓が飛び | 同 | |
| 乾杯の主はカップに取りまかれ | 同 | |

話しながら愉快に本が
見られるのが此店の特
長である。主人公藤堂
氏は何んな話でも出来
る人である。政治も論
ずれば教育も談じ得る
人である。頗る好感を
以て人を迎へるから道
頓廻邊を御散歩の節は
是非立寄つてあげて下
さい。商賣にかけては
全く掛引のない人です

(路郎生)

古

本

高價に申し受けます

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南五六二番

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記するこゝ。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記するこゝ。

▼締切は厳守されたし。

▼各地會報は清記のこゝ。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこゝ。

募 集

第一卷第七號課題

六月二十五日締切

(各題二十句以内)

▲家出

森 東 魚選

▲麥酒

本田 溪花 坊選

▲港

吉川 啞人 共選
竹田 芦穂 共選

第一卷第八號課題

七月廿五日締切

(各題二十句以内)

▲臺所

淺 井 五 葉選

▲子猫

伊 東 夜 乃 郎選

▲白粉

高橋 古城山 共選
龜井 花童子 共選

每 號 募 集

▲近作柳壇(句數無制限) 麻生路郎選

▲各地柳壇(會報)編輯 局選

▲文章(評論研究吟行漫文)

價 定

一部 參拾錢(郵)
六部 壹圓六拾錢
十二部 參圓(共稅)

料 告 廣

特等一頁 拾
普通一頁 拾
同半頁 拾
五號一行 壹貳
壹貳參五 拾拾
圓圓圓圓

▼御送金は痛替日座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます其の場合には御不在中でも頂けるやうに願ひます但集金郵便には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は奮新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十三年六月十日印刷

大正十三年六月十五日發行

第一卷 第五號
(毎月一回十五日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎

兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

大阪府東區農人町二丁目七番地

印刷所 藤本兄弟社

兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

發行所

川柳雜誌社

振替大阪三一五一四番

賣 攤 書 店

(大阪) 明文堂 エミヤ 波屋 百足屋 田村 公立社
(東京) 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田
(金澤) 石井 (函館) 石塚

川柳雜誌社同人 (いろは順)

主幹 麻生路郎

| | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|------|
| 關本雅幽 | 宮内一洲 | 小泉飛水 | 黒木莢豆 | 宗清夜調 | 竹田蘆穂 | 高橋かほる | 太田一聲 | 龜井花童子 | 橋本二柳子 | 岩崎柳路 |
| | 森田輝翠 | 酒井零骨 | 柳川洲馬 | 黒田佳扇 | 武田彩霞 | 高橋古城山 | 太田徹底郎 | 吉川啞人 | 西垣松雨 | 石井風人 |

支部所在地

- 第一支部 大阪市四區八條通南小路 幹事 橋本 二柳子
- 第二支部 大阪市外天下茶屋南下ノ森三五〇 幹事 森田 輝翠
- 第三支部 大阪市外濱寺町羽衣二六一 幹事 酒井 零骨
- 第四支部 大阪市西區鶴町四丁目十三號地嵐山方 幹事 關本 雅幽
- 第五支部 大阪市北區西野田茶園町七九四 幹事 小泉 飛水
- 第六支部 大阪市北區澤上江町二九八 幹事 石井 風人
- 第七支部 大阪市外南濱一八二 幹事 西垣 松雨
- 第八支部 神戸市旭通二丁目ハ三 幹事 宮内 一洲
- 第九支部 山口縣山口町石原小路 幹事 柳川 洲馬
- 第十支部 神戸市中山手通二丁目九四 幹事 武田 彩霞
- 第十一支部 東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内 幹事 岩崎 柳路
- 第十二支部 函館市青柳町五〇 幹事 龜井 花童子

本社幹事 蘆穂(編輯)啞人、古城山(宣傳)二柳子(會計)
一聲(廣告)莢豆(寫真)

さじ睦るあに上卓スーソ車羽



第一 大阪九郎右衛門町
中野商會
電話南二一九三

信用
從來のソースに御満足の出來ぬ方は是非御風味を!! 食堂に 御家庭に

羽車ソース

りあに店品料食國全

大正十三年三月三日第三種郵便物認可(毎月一圓十五日發行)
大正十三年六月十日印刷
大正十三年六月十五日發行

定價 三拾錢